

エッセイ

私の人生

徳増公明

第三章

エッセイ

1. 故アントニオ猪木氏に感謝

10月1日突然プロレスラー・アントニオ猪木氏の訃報ニュースが飛び込んできた。79歳の生涯であった。世界の最強ボクサーや格闘家を相手に、彼がリング上で戦う熱戦を観戦し、応援してきた人も多いことだろう。

死を迎える10日前、彼は病床で、衰弱仕切った姿でTVインタビューに応じていた。これが最後の言葉となった。その時の彼の言葉に感動した。「スポーツを通して平和を目指して「平和の祭典」を実施してきたが、人間は地上を多量のゴミで汚してしまった。これからは地球をきれいにしなければならない」と。また、彼はスポーツ外交を通して世界的問題に取り組んできた。その彼の惜しみない勇気ある行動に、私たちは称賛した。2019年8月の湾岸戦争の際に人質となった私たちを助けてくれた時もそうだった。当時は、日本ムスリム協会会員の皆さんにも心配をかけ、また協会幹部だった方々が在日イラク大使館へ出向き、人質となった日本人の救済を求めて、イラク政府宛て嘆願書を大使に手渡したと聞いている。日本人の人質救済の問題に政府が困り果てていたこの時、国会議員であったアントニオ猪木氏は自身が

バクダードへ赴き、平和外交でこの歴史的事件を解決しようと懸命に動いた。その時のことと人質体験者の一人として紹介しておきたい。この原稿を書くに当たって、アラビア石油（株）社員だった私が、石油鉱業連盟の機関紙「石油開発時報」No. 13（2003年5月）に寄稿した記事でもある。

1990年7月31日、アラビア石油（株）サウディアラビア・リヤード事務所に勤務していた私は一時休暇を取り、東京で家族と一緒に過ごしてからリヤードへの帰路、クウェイトに立ち寄った。クウェイト事務所の同僚たちと近況報告・意見交換をするためであった。2泊して、リヤードへ向かおうとした8月2日の早朝だった。突如イラク軍がクウェイト市内を占拠し国境も空港も閉鎖し、外国人は身動きが取れなくなった。クウェイトには約300人の邦人が在留していたが、そのほとんどが日本大使館へ避難し、同館の地下室で共同生活をすることになった。これだけの人数が3週間余りを円滑に集団生活することができたということは、日本人特有の組織力と協調性があったからである。しばらくして大使館が閉鎖されたので、私たち全員がイラク政府と日本政府の指示に従って移動することになった。8月22, 23日の両日、4つのグループに分かれクウェイトからヨルダンに脱出するためにイラク政府が手配したイラク航空機で飛んだ。ところ

が経由地であったバクダード空港に到着すると待ち受けていたイラク当局者に私たちは全員捕らえられ、大型バスで、市内のマンスール・メリア・ホテルへ移送された。そして、大使館員等公用パスポートを持つ人々を除き、全員がイラク政府のゲスト（来客）と呼ばれる身になってしまった。幸いに女性と子供はすぐに解放され、人質231名は15グループに分けられ、イラク国内の戦略拠点に移送された。私のグループは4名で26日午後4時頃小型バスに乗せられた。窓は厚地のカーテンがかかっていて外が見えないが、日差しさしから西の方へ向かって走っているようだった。バスは途中で暫くとまり、日没を待ってまた走りだした。バスのメーターをチラリと見ると約100km進んでいた。最初の移送先は農業灌漑設備の建設に携わったドイツ人技術者の宿舎だった。隣接して大きな塩酸製造工場があった。この収容施設には、既に英、米、仏、独の人質17名が生活していた。人質の中には突然、別の収容施設へ移送させられたり、また別の収容施設から移ってくる者もいた。私の場合もここから4か所の戦略拠点：化学工場、軍事工場、軍事倉庫の収容所に移転させられた。施設によっては設備や食事、人質の数などが異なっていたが、どの収容施設にも責任者、通訳、料理人、多数の見張り人が配備されており、人質の国籍も一ヵ国に偏らず、インターナショナルで数カ国の人

質共同生活をしていた。私が最後に移ったところはバグダードから南約40kmの軍事工場内の収容施設で、英、米、仏、独、日本（2人）の計6名と少数であった。我々は米国の攻撃に対する盾だったわけで、大切なゲストとされ、危害を加えられることなく、イラク人からサッダームの客人と呼ばれていた。そこで私たち人質は自分たちのことを、英語でゲストとホステッジを絡めてゲステッジと言っていた。収容施設はどこも監視が厳しく、それぞれ気長に忍耐強く待ち、健康維持のため各自が工夫して過ごした。ジョギングする者、母国からの差し入れ本を読書する者、書き物を続ける者、ひたすら話をする者。拘束された生活の中で、最もうれしかったのはラジオを聞くことが許されたことである。東京からのラジオ・ジャパンの特別放送、ニュースと共に流れてくる家族、友人、会社からの声の便りは何よりの楽しみであり、勇気づけられた。

10月になると各国は競ってイラク政府と独自の人質解放交渉を開始した。11月、中曾根元総理が特別機でバグダードにやって来てサッダーム大統領と会い、高齢者と病人74名の日本人人質を連れて帰った。JMA元副会長・武藤英臣氏もその一人だった。12月2日、日本から人質の妻たち36名がアントニオ猪木国会議員と共にバクダードに到着した。バクダードへ行けば夫と

の面会が可能という駐日イラク大使の発言を得て来たという。私の妻もその一人だった。表向きは猪木議員がバクダードで主催する平和の祭典に参加するためということだった。猪木氏は欧米と日本のボランティア青年たち、スポーツ選手たちを連れてきて、イラクの人々に、スポーツ交流を通して平和・友好を訴えかけた。最後の収容施設で人質仲間と昼食事をしていると施設の責任者がやってきて、妻と面会できるようにするから大至急荷物を準備せよ、とのこと。朝のラジオ・ジャパンで妻たちがバクダードに到着していたことを知っていた。これまでの移送とは違い、今回は目的がはっきりしているので案じることはなかった。2時ころ、仲間の人質5人とイラクの当局者たちからも「もうここには戻ってこないことを祈る。今度は別の場所で会おう」と言われながら見送られた。他の人質たちに申し訳ないような複雑な気持ちで収容施設を後にした。特にもう一人の日本人の人質仲間の岡本氏の顔がさびしそうで、とてもつらかった。彼の奥さんは事情がありバグダードに来ることができなかつた。1時間程で到着したのは、最初に移送されたあのマンスール・メリア・ホテルだった。車から出るとすぐに10数名の日本人記者とカメラマンに囲まれ「どのキャンプから来たのか？　解放をどうと思うか？」等の質問を受けた。イラク当局者に9階の部屋に案内されて、1時間程

待っていると妻がやって来た。このすぐ近くのパレスチナ・ホテルから他の日本人妻たちと一緒に来たと言う。この4か月の間に日本で起きた様々な話を妻から聞いた。ラジオ・ジャパンでも聞いていたが、日本国内では政府、会社、知人も解放に向けて全力を挙げてくれていたのだ。妻は在京イラク大使館まで行き大使に面会を求め、公使に会ったり、また一人でリヤードまで行ってアラブ人の親しい友人に会い、解放策について相談していた。そしてバクダードへ行き、サッダーム大統領に直訴するのがベストであると判断したと言う。1階の大食堂に誘導されて降りると、各地の収容施設から日本人の人質仲間が續々と到着していた。この同じホテルで別れてから3か月ぶりの再会である。ほとんどの仲間がすっかり痩せてしまっていたが、無精ひげのげっそりした顔は、家族に会えた喜びでいっぱいだった。3日の午後にはバグダード市内の大きな体育館でアントニオ猪木氏がプロデュースする平和の祭典が開催された。バクダードの一般市民と共に、妻たちと一緒に参加することが許され、満員になった観戦席の一角にまとまって座った。私たちはイラク政府の大切な客人として場内アンスで紹介された。まず、イラク・チームと多国籍チームのバスケットボールの親善が行われ、イラクが勝った。続いて日本から来た20名程の人々による諏訪太鼓の演奏とそれに合わせて踊

る竜の舞。それから、プロレスが始まった。シングル3試合とダック1試合にイラク市民は大喜び。特に米国人レスラーと日本人レスラーの試合で米国人が勝つと大ブーイングであったが、日本人の空手の有段者が米国人レスラーを倒すと大喝采。フィナーレは選手も出演者も全員リングに上がり、平和の歌の大合唱だった。その後、市民は我々の方を向いて激励のエールを何度も送ってくれた。スポーツ外交を通した猪木氏達の熱いメッセージは、確かに届いた。バクダードの市民にも、我々にも。

私たちために、わざわざ日本から来てくれたボランティアの若者たち、選手たち、アントニオ猪木氏に心から感謝する。私たちは自分たちが人質であることなどすっかり忘れて大いにエキサイトして観戦を楽しんだ。だが帰路は厳しいイラク当局の監視付きバスに乗ってホテルに戻った。4日は妻たちが猪木議員と日本へ帰国する日であった。アンマンでは東京行のチャーター便が待っていたからだ。だが妻たちは夫の帰国が許されるまでバクダードに残ると言った。妻達の並々ならぬ決意に我々は感服した。そして、妻たちはアラビア語でサッダーム大統領宛てに手紙を書いた。「私たちは夫を残して日本に帰るわけにはいかない。どうしても夫と一緒に日本へ帰りたい。閣下も一人の親として、一人の夫として家族の気持ちを理解してくれるでしょう」と36名全

員が署名し、イラク当局に手渡した。この嘆願書が影響したのかどうかわからないが、劇的なことが起こった。5日、夕方8時頃イラク当局者がやって来て、人質は全員、一階に下りるようにと指示された。ホテルの玄関前に黒塗のベンツが10数台玄関に並んでいるではないか。全員が乗り込んで列をなして出発し、イラク・オリンピック委員会の建物に到着した。そこには、イラク平和友好連帯協会会長たちと面談を終えた妻たちが待っていた。9時半頃、3階の大きな部屋に全員が通された。するとイラク・オリンピック委員会委員長ウダイ氏が現れた。サッダーム大統領の長男である。彼は我々一人一人と握手をした後、口を開いた。「長い間、皆さんの夫を拘束して申し訳ありませんでした。これはアメリカの攻撃から守るためにものであったのです。あなたたちは今からいつでも夫を連れて日本へ帰ることができます。これはサッダーム大統領の指示です」と、バグダードの日本大使館書記官がウダイ氏のアラビア語を通訳した。誰もがこんな形で人質解放の許可が出されるなどと思ってもいなかった。喜びの大きな拍手が起こった。しかし、皆、収容施設にいる残りの日本人のことが気になっていた。できればゲステッジ全員の解放でありたい。驚いたことにホテルに戻ると、今まで各階を見張っていた何人のイラク当局の監視人たちがすっかり消えていた。もうどこで

も自由に動けるのだ。そして、嬉しいことに翌日、日本から人質全員解放というニュースが飛び込んできた。出国手続に時間がかかったが、8日にバクダードを立ち、ヨルダンのアンマン経由で、日本政府が用意した特別機で10日に成田に着いた。空港では家族、親戚、友人たち多数の大歓迎を受け、感激のあまり目頭が熱くなってしまった。

この事件は、本当に悪夢の出来事であった。まるで物語か映画の中に入りこんでしまったような事件であった。この事件を通して、私たちは家族、友だち、国に守られていることに気付かされた。そして自由はまるで空気のようなものであり、健康の有難さを病気になって初めて気づくこととよく似ていることも。今になって思えば、この事件から様々な教訓を得たような気がする。

湾岸戦争の1年後、私はリヤード勤務から東京勤務になった。そして、数年前のある日、用事があってアラブ・イスラーム学院へ行く途中、麻布十番の地下鉄近くで、ばったり猪木氏に遭遇し、声をかけた。突然であったがバグダードへ人質解放のため行ってくれたことを思い出してくれた。そして、彼は人質だった皆さんに会いたいとのことだった。その当時、彼は仕事でニューヨークにいることが多く多忙なので、時間ができたら連絡することであった。

彼の逝去により、もう会う機会を失ったことは、誠に残念である。最後にアントニオ猪木氏の善行に対してアッラーのご加護を祈ります。そして私たちのために尽力してくださったことに対して、改めて感謝申し上げると共に、心より哀悼の意を申し上げます。

以上



ホテルで解放を喜ぶ猪木氏と人質の妻たち(マンスールメリア・ホテル、バグダード)



人質解放を伝えるニュース(12月3日付、読売新聞)